

索引』というカード索引が残っています。これは、以前ある図書館員がこつこつと蓄積し続けたのをきっかけに、その仕事は現在まで引き継がれています。当時利用者達は、きっとこの手作りのデータベースを重宝したことでしょう。

それ以来、図書館の基本は、やはり資料を整理

し効率よく利用者に提供することではないか、と考えるようになりました。マルチメディア時代へ逆行するというのではなく、先輩の図書館員たちが残してくれたサービス精神を、なんとか新時代の図書館のために生かせないものかと模索しています。

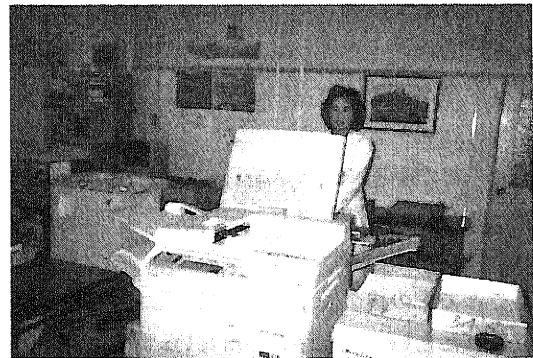
## 新 人

平 石 恵 子

新潟大学附属図書館旭町分館

私は、街に程近い高台に建つ旭町分館に、昨年の春、非常勤職員として勤め始めました。2階にある事務室の大きな窓からは、右に病棟、中庭を挟んで左に研究棟を見下ろすことができ、なかなかいい眺めです。相互利用係で受付業務担当の私は、研究室や図書館内を駆け巡り、たっぷり本を集めてくるや、ひたすらコピー作業に取り組む毎日です。ここまでなら体力でカバーできる仕事ですので、何とかお任せくださいといえるのですが、ここから先のことがそれはもう本当に大変です。居並ぶ洋雑誌に頭がクラクラしているうえに、今まで無縁だった電子メディアなる世界にいきなり入り込んでしまったのですから、まるで平成の浦島太郎の心境です。何を聞かれてもさりげなく答え、電話をかけるほどの自然さで機械を動かす姿に憧れるこの頃です。

国際化の波が新潟大学にも広がり、色々な国の留学生が図書館を利用しています。なかでも群を抜いて多いのは中国からの留学生です。全国からくる複写申込者のなかにも、貴重な外貨を使って、物価の高い日本で研究を続けている留学生がいることでしょう。彼らを始め多くの依頼者へ、無駄



のない複写と発送で少しでも安く提供したい、それが省資源にもつながると考えるのは大げさでしょうか。物や情報等すべてが大量に消費されていくなかで仕事に追われていると、些細なことは軽視されがちです。毎日の作業のなかで、新人としてできることからやれたらと思っています。

研究棟の廊下を歩いていると、昨日も今日もいつも変わりなく机に向かう研究者の姿を目にします。彼らの地道な研究に私の仕事が少しでも役立っていると考えたら、研究棟を回る足取りも軽くなる気がします。中庭に出ると、広く枝を伸ばしている大きな木が目にとまります。「ヒポクラテスの木」と医聖の名をもつこの木には、ピンポン玉

を紐で吊るしたような楽しい実が沢山ぶら下がっています。あたふたとその下を通る私を笑って

るように、また、励ましているように、今日も風に揺れています。

## 旭町分館今昔：一職員の断想

樋熊須美子

新潟大学附属図書館旭町分館

窓の外で、大きなぼたん雪が舞っていた。部屋の内側では、何か会議をしている一コマが、映画のように思い出される。それは、昭和50年1月9日で、第2回医学図書館員セミナーの実行委員会であった。当時教育担当の奈良医科大学の吉本氏と慶應大学の天野氏が熱心に医学図書館員教育について話しておられた。記録によるとその日は天野氏は出席していなかったようだが、私の記憶の中で、その前後の会の天野氏が一緒になって入ってきている。前年の9月に配置換えで旭町分館にきたばかりの私にとって、その時のお二人に接したことでその後の医学図書館員としての自覚が形成されたといっても過言ではない。講師に新潟の図書館員を、とのお話も出て、その場の実行委員をあわてさせたことを覚えている。

医科大学附属図書館協議会（日本医学図書館協会）は昭和2年に新潟で第1回が開催された。また、医科大学共同学術雑誌目録は、新潟医科大学附属図書館が、その編集を一任され、昭和6年に第1版を、昭和17年に3版を、昭和38年に4版和文編を出版している。

そうした華々しい経歴は、当時本館が独立分離し、低迷をきわめていた旭町分館にとって、かえって重いものであった。そんな関係もあって、セミ



ナーの第2回も新潟で開催されることになったようだが、新参者の私は記録やらタイムキーパーやらをやって無事に過ぎた。そしてセミナーの精神が伝わり、しっかり啓蒙された。しかし力及ばず実務のみで、論文発表はできなかった。

その後20余年が経過し、旭町分館も新築を経て、内容が充実した。今はマルチメディアとインターネットに追いつけられながら、電子化された図書館像に照準を合わせ、新しいサービスのためのスペース増築を要求している状態である。

そして旭町分館の歴史は、日々我々館員が一丸となって、先達の業績に追いつくべく、新たに書き加えているのだ。